

[調査報告]

社会福祉援助技術現場実習生の実習の意味について

益満孝一¹、*、西原尚之²、張世哲³、和田要¹、田中顕吾⁴
高寄仁智⁵、大西良⁶、鋤田みすず⁶、中村哲夫¹、久保田昇¹
李玄玉¹、金蘭九¹、後藤秀昭¹、永田俊明¹

【要旨】本研究は、社会福祉援助技術現場実習における配属実習の意味を明らかにするために、実習生にアンケート調査を実施した。本稿では実習の意味について、次の調査項目を中心に検討した。1) 国家資格「社会福祉士」の取得について、2) 「実習後に何がしたかったか」について、3) 「実習中の茶髪などのおしゃれ」について、4) 「実習終了後の施設との関係」についてである。

調査結果は次の通りである。第1に国家資格「社会福祉士」の取得についてはほとんどが希望している。第2に「実習後に何がしたかったか」については、のんびりしたいなど心身のリラックスを望む傾向と、友人など話したいや遊びたいなどの傾向が高いことが明らかになった。特に女性の場合は友人と話をしたい傾向が高いことが明らかになった。第3に「実習中の茶髪などのおしゃれ」については施設によっては許容化が促進されていると指摘できる。第4に「実習終了後の施設との関係」については夏祭りなど、ボランティアなどで行ったというのは男性が高く、実習施設の利用者に会いに行くという情緒的關係では女性が高いということが明らかになった。

以上の結果から、実習教育プログラムにおいて、配属実習中および、実習後に実習生には、男女別の支援が必要であることが明らかになった。女性の実習生は情緒的体験やその関係を考慮した実習生の支援が必要である。

キーワード： 社会福祉援助技術現場実習、配属実習、実習教育プログラム、社会福祉士

【緒言】

少子・高齢化社会の進行に伴って、我が国の社会保障においてソーシャルサービス供給における社会福祉専門職の役割は、全ての国民を対象として、その生活の自立とその支援、さらには利用者の権利擁護の役割など機能の拡大がある。その役割の中核を担っているのはソーシャルワーカーである。このような状況の中で、社会福祉専門職の質の高さを保障する上でも、専門職養成は極めて重要な課題となっている。国家資格である社会福祉士も社会的認知が進み、その社会的責任も益々大きくなっている。

また、厚生労働省や文部科学省の「社会福祉」関連学科開設と「社会福祉士」養成課程の認可が

増加する中で、「社会福祉士」の養成校は急増し、様々な学科での「社会福祉士」養成がおこなわれている。つまり、大学における「社会福祉士」養成は多様化・多量化の状況にある。こうした状況に、実習生の対人関係能力の脆弱性が指摘され、そのような中で、実習前教育にどのような教育が必要であるかを明らかにし、実習生である当事者の視点から実習教育プログラムのモデルを検討することは必要であると思われる。特に社会福祉援助技術現場実習は、講義や演習で学んだ知識・技術・倫理を体験的に統合する上で重要な科目である。その目的は第1に「社会福祉学を総体として学ぶために、社会福祉実習教育は大きな柱を成す内容であり、第2にすぐれた実践力を身につけた社会福祉専門職員養成の立場である⁽¹⁾。社会福祉

¹九州看護福祉大学 看護福祉学部社会福祉学科、*連絡先、²福岡県立大学、³韓瑞大学校（韓国忠南瑞山市）⁴愛知みずほ大学、⁵九州看護福祉大学大学院、⁶久留米大学大学院

援助技術現場実習の実習教育プログラムは、実習事前教育、配属実習中の実習指導・巡回のあり方、実習事後教育などの検討が、実習指導教員、配属実習施設の実習指導者、実習生など実習に関係する者の評価などによって明らかにすることが必要である。社会福祉援助技術現場実習効果の研究結果については、南彩子・登丸寿一⁽²⁾、山井理恵⁽³⁾が報告している。

本稿の調査対象大学の社会福祉援助技術現場実習に関するカリキュラムは次のようになっている。

「社会福祉士及び介護福祉法」による配属実習（以下、「法定実習」と表記する）は、「社会福祉援助技術現場実習 1(3年次第1学期)」と「社会福祉援助技術現場実習 2(3年次第2学期)」であり、各90時間(2週間)の配属実習である。さらに、卒業要件として「社会福祉援助技術現場実習 (4年次1学期)に90時間(2週間)の配属実習がある。

前述した社会福祉援助技術現場実習を体験した実習生にとって、270時間に及ぶ実習の意味はどのようなものであろうか。実際に、社会福祉援助技術現場実習は実習生にとって様々な意味を持つものである。

本稿では、アンケート調査結果を中心にしながら、次の調査項目の観点についての実習生にとっての実習の意味を明らかにすることを目的としている。

調査項目は、1)国家資格「社会福祉士」の取得について、2)「実習後に何がしたかったか」について、3)「実習中の茶髪などのおしゃれ」について、4)「実習終了後の施設との関係」についてである。この調査項目の結果について、実習担当教員の観点から、実習教育、実習巡回で得られた知見をもとに考察を行うことで、実習生にとっての実習の意味を明らかにすることを試みた。

【方法】

1. 調査対象および調査時期

A県B大学社会福祉学科の4年生を対象として、無記名による調査を行った。

調査実施日は、平成16年1月15日～23日で「社

会福祉援助技術演習」(4年次開講)の講義時に配布した。回収は講義中の担当教員による回収と、研究室前に設置した投函ボックスによって調査票の回収をおこなった。調査票の回収数は172で、有効サンプルは158(91.9%)であった。なお、調査の集計・分析は、SPSSのVer.12.0 for windowsで分析を行った。

2. 基本的属性

1) 性別について

アンケート調査の対象者の性別は「男性」が62人(39.2%)、「女性」が96人(60.8%)で、合計は158人である。本調査の分析では、実習生全体と、性別による分析を行った。

このような観点で分析を行ったのは、実習事前教育、実習巡回、実習事後教育など実習生への教育的支援を行った実践活動から、性別による教育的支援の必要性が見いだされる点にある。

2) 配属実習施設について(表1-1)

「社会福祉援助技術現場実習」は3年次に第1学期と第2学期に各90時間、第4年次に第1学期に90時間の配属実習を原則として行っている。次に配属実習施設について見てみる。

「社会福祉援助技術現場実習 1(3年次第1学期)」については、「5.高齢者福祉施設(在宅介護支援センターを含む)」が90人(87.0%)、「3.身体障害者福祉施設」が23人(14.6%)、「4.知的障害者福祉施設」が21人(13.3%)、「1.福祉事務所」が8人(5.1%)、「7.児童福祉施設(保育所を含む)」が8人(5.1%)、「2.社会福祉協議会」が5人(3.2%)、「6.生活保護施設(救護施設など)」が3人(1.9%)の順である。

「社会福祉援助技術現場実習 2(3年次第2学期)」については、「5.高齢者福祉施設(在宅介護支援センターを含む)」が81人(51.2%)、「3.身体障害者福祉施設」が27人(17.1%)、「4.知的障害者福祉施設」が27人(17.1%)、「2.社会福祉協議会」が10人(6.3%)、「6.生活保護施設(救護施設など)」が8人(5.1%)、「7.児童福祉施設(保育所を含む)」が8人(5.1%)、福祉事務所」が5人(3.2%)、の順である。

「社会福祉援助技術現場実習 (4年次)」に

については、「5.高齢者福祉施設(在宅介護支援センターを含む)」が38人(24.1%)、「2.社会福祉協議会」が28人(17.7%)、「7.児童福祉施設(保育所を含む)」が22人(13.9%)、「4.知的障害者福祉施設」が21人(13.3%)、「12.民間企業(NPO法人を含む)など」が12人(7.6%)、「3.身体障害者福祉施設」が9人(5.7%)、「10.病院など医療機関」が8人(5.1%)、「9.精神科病院」が3人(1.9%)、「6.生活保護施設(救護施設など)」が1人(0.6%)であった。「13.その他」が16人(10.1%)の順であった。「その他」は、点字図書館などであった。

社会福祉援助技術現場実習 1と-2の配属実習施設については、大学の指定施設が掲示され、実習生の希望が優先される。体育館に実習対象実習生を集めて、第1希望の施設のシートに、学籍番号と氏名を記入する。この際に、希望の多い施設は実習生同士の「ジャンケン」や話し合いなどで決定するようになっている。実習生の施設の選択基準は、自分の希望、施設の種別と交通の便、または友人と一緒にいけるかなどで決めていることが観察される。実習先の決定についてはその後変更もできる。実習生の希望を優先して、施設の実習先ができるように工夫はしているが、実習生の希望の多い、「社会福祉協議会」「児童養護施設」は実習施設としては不十分である。また、「児童相談所」は法定実習施設・機関としては確保していない。

【結果】

社会福祉援助技術現場実習生にとって、実習の意味は多様である。本稿では実習の意味について、次の調査項目の結果を中心に明らかにする。調査項目は、1)国家資格「社会福祉士」の取得について、2)実習後に何がしたかったかについて、3)実習中の茶髪などのおしゃれについて、4)「実習終了後の施設との関係」についての4項目である。

1)国家資格「社会福祉士」の受験資格取得について(表2-1)

近年、学生の資格志向が強く、在学中に資格をより多く取得したいということから複数の資格取

得を目的とした履修が行われる。これは学生自身だけでなく、保護者の意向も反映している傾向である。

社会福祉士の指定科目が必須科目であり、卒業する際に「社会福祉士」の受験資格が得られるようになっている。こうした意味で「社会福祉士」の取得について、実習生がどのように思っているかについての質問を行った。

「社会福祉士」の取得について見てみると、「1.卒業と同時に、社会福祉士の受験資格が得られる現行制度が良い(現行通り)」は、「男性」が48人(77.4%)、「女性」が74人(77.1%)、「2.社会福祉援助技術現場実習を選択にして、社会福祉士の受験資格を取得したい人だけ在学习中に実習に行くようにするのが良い」は、「男性」が13人(21.0%)、「女性」が19人(19.8%)であり、性別による差はない。男女ともに、約8割近くが、現行通りの「社会福祉士」の受験資格取得を希望している。

資格取得については、約8割が卒業と同時に「社会福祉士」の受験資格が得られる項目を選択している。しかし、2割弱が「社会福祉士」の資格取得を希望するものだけの資格取得に賛成していることは、全学生が資格取得する現行制度の見直しが必要であると言えよう。

2)「実習後に何がしたかったか」について(表2-2:複数回答)

配属実習の終了は実習中の様々なストレスから解放される。実習生の蓄積したストレスへの対処行動は実習生が「実習後に何がしたかったか」で明らかにすることができる。

まず、対象者全体で「実習後にしたかったことについて」を整理してみる。

60%台は、「10.のんびりしたいと思った」について、男性は40人(64.5%)、女性は61人(63.5%)、全体は101人(63.9%)である。

50%台は、「5.友だちと話がしたいと思った」について、男性は25人(40.3%)、女性は67人(69.8%)、全体は92人(58.2%)、「4.遊びたいと思った」について、男性は29人(46.8%)、女性は55人(57.3%)、全体は84人(53.2%)の順である。

40%台は、「11.ともかく、睡眠をとりたかった」について、男性は26人(41.9%)、女性は43人(44.8%)、

全体は69人(43.7%)、「6.学校に行き、友だちと話
がしたいと思った」について、男性は17人(27.4%)、
女性は47人(49.0%)、全体は64人(40.5%)である。

10%台は、「2.茶髪など髪のおしゃれなどがし
たいと思った」について、男性は7人(11.3%)、女
性は18人(18.8%)、全体は25人(15.8%)、「13.実習
施設で実習がそのまま続けたいと思った」につい
て、男性は7人(11.3%)、女性は14人(14.6%)、全体
は21人(13.3%)、「12.何もしたくないと思った」につ
いて、男性は8人(12.9%)、女性は12人(12.5%)、
全体は20人(12.7%)、「8.大学の教員に実習のこと
などが相談したいと思った」について、男性は8
人(12.9%)、女性は11人(11.5%)、全体は19人
(12.0%)の順であった。

最後に10%台以下は、「3.自由に服を着たいなど
洋服のおしゃれがしたいと思った」について、男
性は1人(1.6%)、女性は11人(11.5%)、全体は12人
(7.6%)、「7.大学の授業が受けたいと思った」につ
いて、男性は5人(8.1%)、女性は6人(6.3%)、全体
は11人(7.0%)、「9.一人きりになりたいと思った」
について、男性は3人(4.8%)、女性は5人(5.2%)、
全体は8人(5.1%)、「1.お化粧がしたいと思った」
について、男性は0人(0.0%)、女性は4人(4.2%)、
全体は4人(2.5%)、「14.その他」について、男性は
1人(1.6%)、女性は3人(3.1%)、全体は4人(2.5%)
となった。

以上の対象者全体について選択された項目を整
理した結果を踏まえて、次のようなこと点が指摘
できよう。

まず、「5.友だちと話がしたいと思った」(58.2%)
と「6.学校に行き、友だちと話がしたいと思った」
(40.5%)からは、いずれも友だちと話をすることで、
実習中の体験や友だちとの関係を確認したいこと
などが推測される。次に、「10.のんびりしたいと思
った」(63.9%)と「11.ともかく、睡眠をとりた
かった」(43.7%)からは、実習生が精神的にも身体
的にも休養したいという気持ちが推測できる。最
後に、「4.遊びたいと思った」(53.2%)は心機一転
リフレッシュしたいという意向が推測できる。

次に、男女の回答の仕方について、40%以上の
選択のあった項目について整理する。

男女とも同じ割合について見ると、「10.のんび

りしたいと思った」について男性(64.5%)と女性
(63.5%)、「11.ともかく、睡眠をとりたかった」
について男性(41.9%)と女性(44.8%)でほぼ同じ割
合である。次に、性別で選択の割合が違ったもの
について見る。まず、女性の選択の割合が高い項
目は「5.友だちと話がしたいと思った」について
男性(40.3%)と女性(69.8%)、「6.学校に行き、友
だちと話がしたいと思った」について男性は
(27.4%)と女性は(49.0%)、「4.遊びたいと思っ
た」について男性は(46.8%)と女性は(57.3%)である。

以上の調査結果から、40%以上の特徴は、友人
と話したい、遊びたい、のんびりしたい、ともか
く睡眠をとりたい、という項目が選択されており、
配属実習という大きな課題を終えて、リラックス
したいという心境が推測できる。

実習生は配属実習という慣れない環境と見知ら
ない人との人間関係作り、さらには未熟な専門技
術で実習をこなしながら、実習記録を徹夜しなが
ら記録することもある。なかには、配属実習施設
での宿泊する場合もあり、生活環境も変わったな
かでの実習という学生もいる。実習施設によっ
ては、介護技術を必要とする場合もある。この結果
によって、こうした大きなストレス状況の中で、
実習後の対処行動がどのようなものであるかを示
唆している。

3)「実習中の茶髪などのおしゃれ」について(表
2-3:複数回答)

配属実習の事前指導において、実習中の茶髪な
どは身だしなみの指導として重要である。身だ
しなみは第一印象に大きな比重を持つだけでなく、
実習の意義や意欲を非言語的表現として評価され
ることが多い。また、対人援助職にとって、白衣
などのユニフォームがその職業の象徴とされるよ
うに、身だしなみの持つ意義は大きいといえる。

本調査では、配属実習を行った施設のなかで、
おしゃれが一番許されている施設について「あな
たの実習施設では、実習中の茶髪、ピアス、マニ
キュア、お化粧などのおしゃれについては、ど
うだったでしょうか」という質問を行った。実習
生全体についてその回答の検討を行った。

まず、「5.実習生も職員も許されていなかった」
について、全体は37人(23.4%)で、2割強である。

次に、条件付きながら許容されているのは、「4. 実習生は許されていないが、職員は許されていた」について64人(40.5%)、「3. 実習生は利用者の安全が守られ、利用者などに不快感を与えない程度であれば、許されていた。職員は許されていた」について36人(22.8%)である。

実習生にも許可されていたのは、「2. 実習生は職員と同様に許されていた」について14人(8.9%)、「1. 実習生だけは許されていた」について全体は2人(1.3%)であった。

この結果から、「3. 実習生は利用者の安全が守られ、利用者などに不快感を与えない程度であれば、許されていた。職員は許されていた」が約2割、「2. 実習生は職員と同様に許されていた」が約1割であり、以前のように、一切許可されないという時期から、染髪など身だしなみの問題が過渡期の状況に移行しつつあることが指摘できる。それは、「4. 実習生は許されていないが、職員は許されていた」が4割もあることは、施設の生活施設への移行という視点が進んでいると言える。

4)「実習から得たもの」について(表2-4:複数回答)

実習生が「実習から得たもの」について、次のような結果が得られた。

まず、対象者全体で50%以上の選択のあった項目は、「9. 私は施設の実態を知ることができた」について、男性は48人(77.4%)、女性は76人(79.2%)、全体は124人(78.5%)、「7. 私は大学の講義と施設の臨床現場の違いがわかった」について、男性は37人(59.7%)、女性は69人(71.9%)、全体は106人(67.1%)、「5. 私は利用者とのコミュニケーションの仕方がわかった」について、男性は33人(53.2%)、女性は53人(55.2%)、全体は86人(54.4%)である。

次に、対象全体で30%以上の選択のあった項目は、「6. 私は自分が心を開いていないと利用者も心を開かないことを学んだ」について、男性は28人(45.2%)、女性は38人(39.6%)、全体は66人(41.8%)、「2. 私は社会人としてのマナーが向上した」について、男性は23人(37.1%)、女性は37人(38.5%)、全体は60人(38.0%)、「3. 私は利用者と地域との関係を前向きに考えるようになった」につい

て、男性は13人(21.0%)、女性は36人(37.5%)、全体は49人(31.0%)、「4. 私は本当にしたいことがわかった」について、男性は18人(29.0%)、女性は29人(30.2%)、全体は47人(29.7%)である。

最後に、対象全体で20%以下の選択のあった項目は、「1. 私は実習で社会人として働く自信をもつことができた」について、男性は13人(21.0%)、女性は11人(11.5%)、全体は24人(15.2%)、「8. 私は大学での授業にやる気が出た」について、男性は2人(3.2%)、女性は7人(7.3%)、全体は9人(5.7%)、「10. その他」について、男性は3人(4.8%)、女性は4人(4.2%)、全体は7人(4.4%)である。

「実習で得られたもの」について、第1に自分自身の人間的成長やコミュニケーション技術など自分に関する事と、第2に施設の実態など学業に関する事に分けて検討を行う。

まず、対象者全体について見てゆくと、自分に関する事では、「利用者とのコミュニケーションの仕方がわかった」が5割以上、「自分が心を開いていないと利用者も心を開かないことを学んだ」と「社会人としてのマナーが向上した」が約4割ある。さらに、「本当にしたいことがわかった」が、約3割となっている。このことから、利用者との関わり方や自分のしたいことがわかるなど実習生自身の対人関係能力が向上したことが見いだされる。

「施設の実態を知ることができた」については対象者全体で約8割ある。「大学の講義と施設の臨床現場の違いがわかった」が男性は6割、女性は7割であり、「利用者と地域との関係を前向きに考えるようになった」について、男性は2割、女性は約4割で、男女で差が見られる。このことから、実習体験によって施設の実態や講義と施設の関連づけができたと言えよう。さらに、地域での利用者の生活を支援する意味などが肯定的に考えられるようになったという学びが示唆されていると言えよう。

5) 実習終了後の施設との関係について(表2-5:複数回答)

実習生にとっては実習先での不安や課題を乗り越えて、実習施設での人間関係や自分の専門職としての能力について、実習体験による自信を得る

かは、卒業後の就労に大きく影響すると考えられる。その第一段階として、実習先との関係がどのようなものであるかを明らかにしておくことは意味があることと言える。

実習終了後の施設との関係についての複数回答の結果について見てみる。

「2.実習施設の夏祭りなどボランティアに行った」について、男性は43人(69.4%)、女性は53人(55.2%)、全体は96人(60.8%)、「1.実習施設の利用者などに会いに行った」について、男性は13人(21.0%)、女性は39人(40.6%)、全体は52人(32.9%)、「4.実習施設の職員などに相談などに行った」について、男性は12人(19.4%)、女性は18人(18.8%)、全体は30人(19.0%)、「3.実習施設にアルバイトに行った」について、男性は10人(16.1%)、女性は11人(11.5%)、全体は21人(13.3%)であった。

まず、「2.実習施設の夏祭りなどボランティアに行った」について男性(69.4%)が極めて多く、女性(55.2%)も約半分以上が行っている点は注目される。次に、「実習施設の利用者などに会いに行った」について女性(40.6%)であり男性(21.0%)と比べて、利用者との情緒的な関係を大事にする傾向が見いだされる。次に、「4.実習施設の職員などに相談などに行った」について男女ともに約2割であり、性別に差は無いと言える。最後に、「3.実習施設にアルバイトに行った」について男性(16.1%)と女性(11.5%)で1割以上がアルバイトを行っていることは実習による効果の一つとして言えよう。男女差については、アルバイトの求人問題もありその差に意味があるかは判明できない。

以上のことから、実習を契機として「ボランティア」だけでなく、「アルバイト」や「施設職員への相談」に発展していることは着目される。

【考察】

次に、上述した調査結果をもとに、筆者の実習教育経験による知見を交えながら、実習生にとっての実習の意味について考察を述べる。

まず、国家資格「社会福祉士」の取得については、8割以上が卒業と同時に資格取得できる現行制度を選択しているが、2割弱であるが「社会福

祉士」の資格取得を希望する学生のみが社会福祉援助技術現場実習にいくのが良いという項目を選択している点は注目に値する。この選択の背景には、「精神保健福祉士」の受験資格、「高校福祉」「養護教諭」の教職科目が履修できることもあり、教職科目を主に修得したい学生にとって、「社会福祉援助技術現場実習」が学業上大きな負担になることがあると思われる。さらに、社会福祉学科に入学する学生が、入学前あるいは就労という点でも、社会福祉関連を考えていない学生の増加があると思われる。今後、「社会福祉士」の受験資格科目だけでなく、「社会福祉援助技術現場実習」の配属実習の履修についても十分な動機付けが得られない学生が増加することが予想される。以上のアンケートの結果から、現行制度の必修による「社会福祉援助技術現場実習」の履修から、選択履修に移行することが望ましいと言える。選択履修に制度改革することによって、実習の意味が高まる実習生が増えると言えるであろう。

次に、「実習後に何がしたかったか」についてみる。

配属実習は実習生には対人関係を中心とする大きなストレスの中での行われていると言って過言でない。第1に日常通り慣れない交通機関で施設・機関に通うこともあり、実習施設も新しい環境であること、第2にほとんど知らない人であることからの対人関係を構築するまでの大変さ、第3に実習施設の実習指導者などからの評価の対象であり対人関係でも評価対象となることから自分の言動に対する気づきなどの緊張感、第4に利用者との対人関係を構築する困難にともなう不安、第5に利用者の言動や行動パターンの理解ができないことからの混乱、第6に実習施設によっては実習生のトラウマが触発されるなどの心理的動揺、第7に実習指導者や実習巡回教員などの指導にともなう心理的な負担などがある。さらに、実習生によっては、「人見知り」や「対人緊張」などの性格上の問題を持つ者だけでなく、異年齢の人との対人コミュニケーションの体験不足から、何を話したらいいかわからない、どのように振る舞えばいいかわからないという点でも対人関係におけるコミュニケーションの課題を抱える実習生は多い。

例えば、年齢が一つ違って会話することに困難を感じる学生は少なくない。

配属実習後は実習中の様々なストレスから解放され、実習生の蓄積したストレスへの対処行動が明らかになった。その対処行動としては、次のように整理できる。実習を終えて、友人と話をし、本来の自分を取り戻したい、あるいは実習体験を話すことで、ピアカウンセリング効果による癒しのニードが生じていると思われる。また、睡眠をとることで心身を回復したい、あるいは遊びを通してリラックスしたいという対処行動と解釈できる。よって、実習中のストレスへの対処行動は、睡眠をとるやのんびりするなど心身共にリラックスする傾向と、友人らと情緒的交流を通じて情緒的なりラックスを求める傾向が大きいと言える。特に女性が男性より選択の割合が高い項目は、友だちと話がしたいや遊びたいであった。このことから、実習後には友だちという気心の知れた情緒的關係での交流をできるような配慮が必要であると言えよう。

以上、実習生にとっての実習の意味について、実習におけるストレスとその対処行動という観点を中心に述べてきた。

実習生がよりよい実習を体験するためには次のような方策が実施されることにより、実習の意味が高まると言えるであろう。第1に実習事後指導においては、実習生同士の実習体験の共有化が必要であることが言える、第2に実習終了後の実習終了レポートなどの課題についても十分な猶予期間をおくことが必要であると言える。このような実習生の心身のリフレッシュを考慮した実習教育プログラムの作成は実習生の実習についての心理的ゆとりができ、自分の実習体験を仲間と共有することで客観化できるとともに、「自己覚知」にも有効であると思われる。

第3に、「実習中の茶髪などのおしゃれ」については、染髪など身だしなみの問題は社会福祉施設・機関と社会的認知の相違の動向と関連して、実習生の染髪の許容度が高まっている点が注目される。

この染髪などの許容化は、社会福祉施設が措置施設としての最低限度の生活という収容施設から、

生活施設への移行しており、さらには通所施設や在宅介護支援センターなどのセンター機能の施設併設などにより地域社会との交流が増加したことなども大きな要因と考えられる。また、近年の入所者の権利擁護の促進も利用者の生活の質の向上が促進され、生活施設の社会化の促進が進んでいると推測できる。

特に、特別養護老人ホームなどは、Q.O.L運動もあり利用者自身もおしゃれや白髪などの問題解決として染髪を行うこともある。また、社会的風潮としても染髪がおしゃれとして認知されるようになり、職員も社会人の一人としての染髪が拡大しつつあることがその背景にある。

社会福祉施設・機関の職員も、生活を支援する専門職であるとともに、地域で生活する生活人でありその身だしなみは、利用者にとってはQ.O.Lや「生き甲斐」としても大きな意義がある。それは専門職がロールモデルであることからおしゃれの問題は、生活の場での支援をどのように考えるかという新たな視点での問題を提起しつつあると言えよう。

実習生にとっては、おしゃれを規制されることで、実習に対する意識は大きく高まると言える。自由気ままな学生生活と違い、実習という形で「社会」を体験し、専門職としての就労体験をすることは、大きな意味があると言えるであろう。特に、おしゃれが規制されることは、「自己表現」の規制であり、「社会人」としての意識性を高めるものとなる。

第4に「実習から得たもの」については、第1に自分自身の人間的成長やコミュニケーション技術などが獲得されたという認識が多い。第2に施設の実態と、講義と施設の関連が経験的にもつながったということが得られたものとして認識されている。この自己の成長などの認識は、実習生にとって、専門職としての自信につながっていると言える。

以上のように、実習生にとって、実習から得られた成果についてどのように認識しているかが明らかになった。

第5に「実習終了後の施設との関係」についてみても。

配属実習は見知らない環境での見知らない利用者や専門職との対人関係の場でもある。我が国の教育制度が同一年齢による義務教育に代表されるように同年齢・同質の集団教育である。しかし、社会は年齢を初め、異質な集団で多様な関係である。こうした教育環境と社会との専門職としての最初の本格的な接点が「社会福祉援助技術現場実習」である。その配属実習施設と実習生の間で、多様な関係が維持されていることが明らかになった。まず、実習施設の夏祭りなどボランティアに行った学生が6割であり、特に男性が7割もいる。次に、実習施設の利用者などに会いに行ったなどは女性が4割であり、利用者との情緒的な関係を大事にする傾向が見いだされる。また、「実習施設の職員などに相談などに行った」は男女ともに約2割もいる。

以上、論述してきたように、実習後に施設に行く意味は、多様な人間関係を持つ意味でも実習事後教育の意義としても大きいと言える。例えば、実習から時間が経つことによって、客観的に実習施設を再見聞することで、未知から既知の施設となり、実習指導者など職員や利用者との施設の人間関係などから懐かしさなどの肯定的心情が生じやすいことがあげられる。また、ボランティアで行く場合などであれば、担当した利用者との情緒的な人間関係だけでなく、介護などの支援ができることで、対人援助技術や能力の向上を実感できる。実習生として評価されないという精神的な気楽さが、実習施設という環境に対して身近さを感じさせる点があると思われる。

実習施設との実習後の関係は、その実習が大きな意味があったことを意味するものである。その関係が男女によって違うこととは注目すべきことである。

【結論】本稿は、社会福祉援助技術現場実習が実習生にどのような意味があるか、前述したように次の4点についての調査結果を中心に考察を行い、さらに筆者の実習指導で得られた知見をもとに論述した。

第1に国家資格「社会福祉士」の取得についてはほとんどが希望している。第2に「実習後に何

がしたかったか」については、のんびりしたいなど心身のリラックスを望む傾向と、友人など話したいや遊びたいなどの傾向が高いことが明らかになった。特に女性の場合は友人と話したい傾向が高いことが明らかになった。第3に「実習中の茶髪などのおしゃれ」については施設によっては許容化が促進されていると指摘できる。第4に「実習終了後の施設との関係」については夏祭りなど、ボランティアなどで行ったというのは男性が高く、実習施設の利用者に会いに行くという情緒の関係では女性が高いということが明らかになった。この結果から、配属実習中および、実習後に実習生にどのような支援をすることが必要かということの示唆を得ることができた。さらに、実習後の施設との関わりが継続していることが明らかになった。

以上の4つの観点について、実習生にとっての実習の意味が明らかになった。

最後に、本稿は「社会福祉援助技術現場実習の実習効果に関する調査研究班（研究責任者益満）」による「社会福祉援助技術現場実習の実習効果に関する調査」の結果について、西原尚之・張世哲・田中顕吾・高寄仁智・大西良・鋤田みすずと数回の研究協議を重ねて作成したものである。本稿では枚数の制限もあり、アンケート調査結果の一部について掲載した。

【謝辞】

本研究の調査実施では、B大学の社会福祉学科の社会福祉援助技術現場実習および社会福祉援助技術演習の各先生にご協力頂きました。最後に、アンケート調査にご協力頂いた学生のみなさんに心より御礼申し上げます。

【文献】

- (1)宮田和明・川田誉音・米澤國吉・加藤幸雄・野口定久編集 三訂社会福祉実習.中央法規; 1998. p.9
- (2)南彩子・登丸寿一.社会福祉援助技術現場実習における総合的評価をめざして.社会福祉実践理論研究. 第9号: 2000. p.90
- (3)山井理恵.社会福祉現場実習における学生の自己評

価.社会福祉実践理論研究.第8号:1998. p.55-67

(4)岡本榮一・小田兼三・中嶋充洋・宮崎昭夫編集.福祉
実習ハンドブック.中央法規出版;1993

(5)日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会編.「現
場実習」指導マニュアル.全国社会福祉協議会;1989

表1-1 配属実習施設について

配属施設・機関		A. 社会福祉援助技術現場実習 1 (3年次第1学期)	B. 社会福祉援助技術現場実習 2 (3年次第2学期)	C. 社会福祉援助技術現場実習 (4年次)
		度数	8	5
	%	5.1%	3.2%	0.0%
1.福祉事務所	度数	5	10	28
	%	3.2%	6.3%	17.7%
2.社会福祉協議会	度数	23	27	9
	%	14.6%	17.1%	5.7%
3.身体障害者福祉施設	度数	21	27	21
	%	13.3%	17.1%	13.3%
4.知的障害者福祉施設	度数	90	81	38
	%	87.0%	51.2%	24.1%
5.高齢者福祉施設(在宅介護支援センターを含む)	度数	3	8	1
	%	1.9%	5.1%	0.6%
6.生活保護施設(救護施設など)	度数	8	8	22
	%	5.1%	5.1%	13.9%
7.児童福祉施設(保育所を含む)	度数	-	-	0
	%	-	-	0.0%
8.精神保健福祉施設	度数	-	-	3
	%	-	-	1.9%
9.精神科病院	度数	-	-	8
	%	-	-	5.1%
10.病院など医療機関	度数	-	-	0
	%	-	-	0.0%
11.小学校・中学校・高等学校など	度数	-	-	12
	%	-	-	7.6%
12.民間企業(NPO法人を含む)など	度数	-	-	16
	%	-	-	10.1%
13.その他	度数	158	158	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	度数	158	158	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表2-1 国家資格「社会福祉士の受験資格取得」について

		1.男性	2.女性	合計
		度数	48	74
	%	77.4%	77.1%	77.2%
1.卒業と同時に、社会福祉士の受験資格が得られる現行制度が良い(現行通り)	度数	13	19	32
	%	21.0%	19.8%	20.3%
2.社会福祉援助技術現場実習を選択にして、社会福祉士の受験資格を取得したい人だけが在学中に実習に行くようにするのが良い。	度数	1	3	4
	%	1.6%	3.1%	2.5%
3.その他(具体的に)	度数	62	96	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	度数	62	96	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 2 - 2 「実習後に何がしたかったか」について（複数回答）

		1. 男性	2. 女性	合計
1. お化粧がしたいと思った	度数	0	4	4
	%	0.0%	4.2%	2.5%
2. 茶髪など髪のおしゃれなどがしたいと思った	度数	7	18	25
	%	11.3%	18.8%	15.8%
3. 自由に服を着たいなど洋服のおしゃれがしたいと思った	度数	1	11	12
	%	1.6%	11.5%	7.6%
4. 遊びたいと思った	度数	29	55	84
	%	46.8%	57.3%	53.2%
5. 友だちと話がしたいと思った	度数	25	67	92
	%	40.3%	69.8%	58.2%
6. 学校に行き、友だちと話がしたいと思った	度数	17	47	64
	%	27.4%	49.0%	40.5%
7. 大学の授業が受けたいと思った	度数	5	6	11
	%	8.1%	6.3%	7.0%
8. 大学の教員に実習のことなどが相談したいと思った	度数	8	11	19
	%	12.9%	11.5%	12.0%
9. 一人きりになりたいと思った	度数	3	5	8
	%	4.8%	5.2%	5.1%
10. のんびりしたいと思った	度数	40	61	101
	%	64.5%	63.5%	63.9%
11. ともかく、睡眠をとりたかった	度数	26	43	69
	%	41.9%	44.8%	43.7%
12. 何もしたくないと思った	度数	8	12	20
	%	12.9%	12.5%	12.7%
13. 実習施設で実習がそのまま続けたいと思った	度数	7	14	21
	%	11.3%	14.6%	13.3%
14. その他	度数	1	3	4
	%	1.6%	3.1%	2.5%
合 計	度数	62	96	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 2 - 3 「実習中の茶髪などのおしゃれ」について

		1. 男性	2. 女性	合計
1. 実習生だけは許されていた。	度数	1	1	2
	%	1.6%	1.0%	1.3%
2. 実習生は職員と同様に許されていた。	度数	4	10	14
	%	6.5%	10.4%	8.9%
3. 実習生は利用者の安全が守られ、利用者などに不快感を与えない程度であれば、許されていた。職員は許され	度数	15	21	36
	%	24.2%	21.9%	22.8%
4. 実習生は許されていなかったが、職員は許されていた。	度数	20	44	64
	%	32.3%	45.8%	40.5%
5. 実習生も職員も許されていなかった。	度数	19	18	37
	%	30.6%	18.8%	23.4%
不 明	度数	3	2	5
	%	4.8%	2.1%	3.2%
合 計	度数	62	96	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表2 - 4 「実習から得たもの」について (複数回答)

	1. 男性	2. 女性	合計
1. 私は実習で社会人として働く自信をもつことができた	13	11	24
	21.0%	11.5%	15.2%
2. 私は社会人としてのマナーが向上した	23	37	60
	37.1%	38.5%	38.0%
3. 私は利用者と地域との関係を前向きに考えるようになった	13	36	49
	21.0%	37.5%	31.0%
4. 私は本当にしたいことがわかった	18	29	47
	29.0%	30.2%	29.7%
5. 私は利用者とのコミュニケーションの仕方がわかった	33	53	86
	53.2%	55.2%	54.4%
6. 私は自分が心を開いていないと利用者も心を開かないことを学んだ	28	38	66
	45.2%	39.6%	41.8%
7. 私は大学の講義と施設の臨床現場の違いがわかった	37	69	106
	59.7%	71.9%	67.1%
8. 私は大学での授業にやる気が出た	2	7	9
	3.2%	7.3%	5.7%
9. 私は施設の実態を知ることができた	48	76	124
	77.4%	79.2%	78.5%
10. その他	3	4	7
	4.8%	4.2%	4.4%
合 計	62	96	158
	100.0%	100.0%	100.0%

表2 - 5 「実習終了後の施設との関係」について (複数回答)

		1. 男性	2. 女性	合計
1. 実習施設の利用者などに会いに行った	度数	13	39	52
	%	21.0%	40.6%	32.9%
2. 実習施設の夏祭りなどボランティアに行った	度数	43	53	96
	%	69.4%	55.2%	60.8%
3. 実習施設にアルバイトに行った	度数	10	11	21
	%	16.1%	11.5%	13.3%
4. 実習施設の職員などに相談などに行った	度数	12	18	30
	%	19.4%	18.8%	19.0%
合 計	度数	62	96	158
	%	100.0%	100.0%	100.0%

[Report]

Meaning of Fieldwork Training for the Students in Social Work Course

Kouichi Masumitsu*, Naoyuki Nishihara, Cang Saecheol, Kaname Wada, Kengo
Tanaka, Yoshitomo Takasaki, Ryo Onishi, Misuzu Sukita, Tetsuo Nakamura,
Noboru Kubota, Lee Hyun Ok, Kim Rangu, Hideaki Gotoh, Toshiaki Nagata

【Abstract】

In an attempt to clarify the meaning of the field placement during the social work internship course, a questionnaire survey was conducted amongst the interns. This paper mainly examines the following items in regard to the meaning of the fieldwork training: 1) acquiring the national license of “certified social worker”, 2) what they wanted to do after the internship, 3) leeway in fashion such as hair coloring, and 4) relation with the institute after the internship. The survey results for the respective items are as follows. First, most of the students expressed their hope for attaining the social worker certificate. Second, two directions, relaxation of body and mind (“I wanted to just relax.”) and spending time with friends (“I wanted to hang out with friends.” “I wanted to talk with friends.”), were manifested in regard to the post-internship activities. Female students showed a particularly high tendency to talk with their friends. Third, leeway in fashion, such as hair coloring, is increasing in some institutions. Fourth, as for the relation with the institute after the internship, more male students visited the institutes as a volunteer for the summer festival and other events, whereas more female students visited the institutes to see the users, demonstrating their emotional attachment. These results revealed that, in the education program for the fieldwork training, gender-specific support was required for the interns during and after the field placement. In particular, female interns needed the support that takes account of their emotional experience and its effect.

Key words: fieldwork training in the social work course, field placement, education program for the fieldwork training, certified social worker

*Corresponding author, FAX : +81-942-43-8537, E-mail : ko-masu@kaw.bbiq.jp